この一月公開された映画「母とくらせば」の山田洋次監督がある※新聞に「家族や地域変わった」と題し今日の社会で失われたものについて書いています。

〈引用〉

戦前からの家族の形は一九五〇年代まで続いていました。その時代の都会での暮らしは、小津安二郎監督の映画「東京物語」に残されています。東京で暮らす子供たちを訪ねる老夫婦を描くこの映画では、子供、孫との家族の情愛を映しだしています。：途中略：六〇年代以降、日本は高度成長を遂げましたが、それは同時に家族の在り方を破壊しました。経済成長に伴って父親は残業で家に帰らず、子供たちも受験戦争で塾に通い、帰ってもすぐ自分の個室に入ってしまう。夕食もバラバラになり、一家だんらんがなくなった。

：途中略：　家族の次には地域社会が崩壊します。かつては外に出れば近所の怖いおじさんや、豆腐屋のおばさんらに声をかけられ、いろんなことを教えてもらった。でも、そうしたつながりは面倒くさいものとしてさけられるようになってしまった。

〈引用終わり〉

さらに今は、買い物一つとっても、コンビニや自動販売機で会話しなくてもすむ。インターネットを使えば、部屋の外に出ることさえなく、一言も会話することなく買い物も映画も見ることができてしまう。これでは子どもたちは益々人間への関心が薄れ、スマホでのメールだけでやり取りしたり、ゲームや動画といったバーチャルの世界にはまり、現実の人間関係が希薄になり、社会への関心も無いまま大人になってしまうのです。

急激に変化している今日の社会、ただ過去を懐かしみ元に戻そうと考えても意味がありません。現状の中で、私たち一人一人ができることを、日々の日常の中の小さな心がけを大切にすることではないでしょうか。

例えば、都留市を舞台にした映画「かぐらめ」のように、隣のおじさんやおばさんたちが大切にしている地域の伝統芸能に積極的に参加してみる。『協働のまちづくり』の防災訓練や文化祭に関わってみる。それも、我が子や孫を連れていってみてはどうでしょうか。

家族の中でも、季節の節々に行われてきた「松飾り」、「節分」、「雛祭り」といった行事を意図的に盛大にやってみる。その時は個々の家庭だけでなく仲間の親同士が協力してやってみてはどうでしょうか。また、週に一、二回家族が揃って食卓を囲む日を設ける、「おはよう」や「いってきます」といった当たりまえの挨拶を大切にする等身近でできることを広めていくことが大切ではないでしょうか。

※…読売新聞平成27年1月6日付け

連載・青少年健全育成シリーズ　第296回

「身近な人との関わりを大切に」

青少年の声かけあいさつ運動の推進
『大人も子どももすすんであいさつをしよう』

毎月第１日曜日は「家庭の日」
毎月第３日曜日は「青少年を育む日」です。

青少年育成都留市民会議編集委員

広報「つる」広告募集！

あなたのお店の広告を広報つるに載せてみませんか？
広報「つる」は、都留市内の各家庭に配布されています（10,500部発行）ので、多くの方の目に触れます！

問合先：総務課　法制広報担当

広告料金

掲載場所	印刷色	金額 / 枠	備考
裏面	カラー	20,570	2カ月掲載
内面	2色刷り	10,280	2カ月掲載

掲載月は、①1・2月②3・4月③5・6月④7・8月⑤9・10月⑥11・12月の６パターンとなります。
掲載状況は、下記をご参考としてください。
また、詳細につきましては、ぜひお問い合せください。

広　告　掲　載　欄

広　告　掲　載　欄